

「いただきます」

川口市立十二月田中学校 三年
中 沢 琴 巳

「いただきます。」

この一言は誰もが一日に一度は使う言葉だろう。「ご飯」これだっていわば、毎日かさず食べている。あなたにとってお米とは、何か。わたしにとってお米とは、大好きでやまないものだ。大好きなものこそ、たくさん食べたくなる。

「お母さん、ご飯おかわり！」

私が夕食の時に、よくおかわりをするようになったのは小学校五年生からである。小学五年生のときに私は、米作り体験を行った。その頃の私は、農家の人の苦労や気持ちなど、何一つ知っていなかった。だから私の頭の中のイメージは、「種をまいて水やりをする」こんな安易なイメージであった。友達と一緒に田んぼに足を踏み入れた。少しひんやりとした、やわらかくてぬくもりを感じる土。このとき初めて、米が育っている原地の触感を知った。田んぼの中央に行くだけでも足が土に引き込まれて行き、それだけでも体力がうばわれていった。

次に苗を植えた。腰をひくくして、一本一本丁寧に苗を植えていく。それだけではない。苗が倒れないようにしっかりと植え、一本一本の苗の間隔をそろえる。一本の苗を植えるのにここまで体力をうばわれるなんて、思ってもみていなかった。だが、このように、一本一本の苗にたくさんの方の努力、米に対する愛情、輝く汗が米の最強の肥料となるからこそ、きらきらと輝きのある米になるのだと思った。

米がすくすくと成長して、収穫の秋になった。この日まで何度か米を観察をしていたが植えた六月頃の苗とは、まったく別人のようだった。苗は、あざやかな緑色から茶色がかかったすすき色へと変身をとげ、苗の長さも四〜五倍くらいの長さとなっていた。米は、人間以上に、生命力もあり成長するスピードも早く、驚いた。私たち一人一人が心を込めて、米に愛情を届けた分、自分が思っていた以上にたくさん収穫することができた。やはり、自分の頑張りとお米の成長は比例していた。米の収穫量がわたしのやりがいの一部だった。

収穫された米は後日、学校給食の主食として全校生徒にふるまわれた。大人がよく言う言葉、

「やっぱり自分で作ったのが、一番おいしいやあ——。」

自分たちで作った米を口に入れてかみしめた瞬間、やっとその言葉の意味を実感できた。たしかに、自分で作った米は毎日食べているお米よりも、何倍もおいしかったし、米一粒一粒が輝きをはなっていた。この米を食べる前にみんなで口を揃えていった魔法の言葉、

「いただきますあーす！」

には、日頃の農家さんへの感謝の気持ち、おいしく育ってくれてありがとうという気持ち、全ての思いが込められていた。もちろん、米にも、「ありがとう。」と心で会話した。

小学五年生の米作り体験から四年経った今でも、米への感謝の思いはかわらない。小さな一粒の米だが、そこには人々を支える栄養がたくさん詰まっているのだ。自分と米のつながりを大切にして、これからも「いただきます——!!」

と、米一粒に感謝して味わっていききたい。